よたゞつ代文庫ぶ

へ遠13
829

とはづれ文稽古

遠13 ヘ 門
號 829
巻
東京牛込區大久保餘丁町百拾貳番地
坪内雄藏

見る所しかしらぬは千車北文と蕙好が
書残せしは甚くめづらしき人のつとめ
おくれし諸くれ書物是治人の助と
なすものにて所しきは今の世間の
收文ありしむかしと待て撰べき事で
かしうありしすこしき月の融我人の二つび
みえざりければ所もかしこ門めすきて年
乃まゝにまた待宿のすゝ掃ひ母風の
しひて 書撰ありし所と小笹の手備
みつけてそれ中に集めて是をすさまず

明治三六年十月十三日
坪内雄藏氏寄贈

329

来める人にみすれは京津の里はね
とらかくすみれ帳家にふかくおさめき
ひとの身にとりあるは時花のなれの男女
を紙細工せられしに筆墨のこまくな
洗井の女筆もうらさきゝに芝居子なる筆
すもるとおゝき様かはるこゝちあるし
は娘きえじめ栄花をなうしなく使
つゞけりこ大かた損のむかし人の心も
みえはくうりこむ事也

其月其日　西鶴

萬の文反古

初巻目録　一巻

（一）世帯の大事は正月仕舞
路分庭をる人は世のさかいは年の暮
千里あげても掛銭はゆるさず

（二）栄花の引込所
江戸手代は京の事も外
鎌倉へ隠居の年頃

（三）百三十里は所を捨る乃せん心

ちうげの江戸へくだりし今の浪人

いづれもの内義見切目に塩梅書

（四）来八十九日は業體献立

むかし京の深き家とはいへど宮よ又

無おそびに野郎見せざる難波風

（一）世帯は大事は正月仕舞

十二月九日の書中伊勢屋十右衛門へ毎十二日にくりつき請取し

一家世事にて大方節季仕舞いきされ候よし海見えし家元蔵ひ払ひ

跡にて売りし小得せ当年は殊に米さへわりしゆへ侍衆のつまりと存ず

まり申され一候掛申まで雅義仕候此津あらば我共には此方に越年

なられ候事心得に思ひ年中事あまりなく申すなべくは先七ケ条をのぞかせられ

三ケ年と書付の趣に銀子請座は目録尺合遣ひあまりやうに拂ひ申

さるべくは田畑貸は霜月師走両月は取り入七月分四ヶ月百は捨置淀

あるべくは米屋へ金子三両内上ヶにして暮用は追付年内に我共の

ぼる分にして年分ね三俵成程加賀の上を請取内一俵は新米中白にて合せ外

に婦米三斗請取あるべし定めて女房どもは五斗とも申候ともかなはず

東京牛込區大久保餘丁町百拾貳番地 坪内雄藏

無用になされ毎年の不倒遣てすからの状更(ふけ)て実しがらく候お亀おひさ
娘どもも待る餅など、ならぶ時分にはあずから長四郎が叩くを待ちうま
りしとも祖母に取りかへし候やうに評合なさるべし。正月着物の事今年
は娘共ハ去年の事にいたすべく候。長四郎共先日より申しかし候通りに我等
浅黄二重の羽織を御茶に染め目を引袖下ハちよとつぎ候して着せ申
さるべく候。帯ハ我等が前着三ツ割の徳延嫁へまいらせ申候ともなるべく候。其
方も我等花色紬を着て元日の礼をつとめ毎年の手帳を見合せ旦那様
失念なくまいらせ候も不都合しやくしきひにも左迄柱暦ニ仕替申さるべく候。試
本大の扇きひのもらく御筆一対にてなさるべし。町内へ御年始の箸二膳づ
年玉つかひ申候も是ハ無く無用ニ仕べく候。今迄やり付たる門なとへ
状の取りぬうちにあしもとちかく戸を掃(ひらき)て名乗ひ捨に礼を仕舞申さるべし
あまくやまくとも卿無用になさるべし。大日黒寺に塩鯛二枚で持明申さるべし

扨下女どもが仕きせも皆絞なし浅黄の木綿種々にして袷に仕立申さ
冬中は去年様への薬代として牛房三把に銭五百文添て親仁へ
しかと申し根まかりして、やり申さるべく候。大津屋へ六千め貸ものにて
利銀おとし正月の十四日ニ元利共にお済し申べしと堅く交合
暇ハ取り申さるべし。家主へ五人組へ付とどけ申しとこされ候ふとし。これハ
平人なくは又堺屋の鞍杉家の銀取のまゐりし時九月前の箕田に
違ひあり其時の差ハ所をおこさせ今一度帳面を見合せお済し申べし
と成程けつかうに取りはからひ申べし。其手代江戸へくだり此方居申さば此方
来ハのぞしよしねむしての拂ひおとし一向にならしし事無用にて大晦日の
四つ過まで百目の所へ二十五匁づつ割付申無に此通りと申やかましき事より
手代どもに言葉をかけ申さるべし。人は鬼ハなく候てもし火乱とつ
みして茶釜の下を焚(こう)ず下く寝(ねさ)せて其方一人居て拂ひ申さるべく候か

あしざく我れが心より宿をも違ひなされ候へくは何事も親仁の心にさされ
さうあしく相成候へく足を引立て候やうに我子さんじよに申上候程有
候よくば物事倹約の心は指南に於て商売を致し金子三百両ほど上に付けし
是は元来両親より格別に手なれ候て壹掛りはじめ候の無りより
いろさまざまし置候て身分別も致しゆへ四千四百貫目余りもいまだ候
まてしも人の気につき候ふうちに覚悟して指南の上に一両まで五百人程
程の田地をもとめ置きし此後より何時を請取る事もなく女房ども
親仁より借りし銀子さし引して相当道具ももどしやらせ候べしやう
の心得の事親子の中にても書き置候せり相ならぬず申込み上へ
二十九年より己の勘定いたし見候へば凡そ余りけしに是は四百
三拾九貫目とみえ候し然ども銀の利などり三百十四貫目余出来し
又掛の外に三拾七貫目余り此外月々見えての豊ぞん米なりまで

八十四五貫目其上に拾九貫目親仁の心づもり借銭すます根より済ぬ銀を
取りあつめ今の身代をこしらへ事口惜しく此上ますます我が思案付る事
御座なく今年の節季くろうなるにつき思ひきり申候てし此月中
取りまとめ致す心得にて居候共何事も後年の相場一銭も心出しけるもある
成じくば此あたりに焼木は樫の枯れ枝を拾千掛ならりあげよき申べし
此外は萬事の海老も無用とし

極月十八日　西藤四郎

大和屋　庄五郎殿

此其の子細を考へ候に親は梅花の中へ商ひにより亭主が方へ節季
の子細をこし候より近江とみさりても貴人は皆大金の世話り
なり是に能井せり候き気まくし借銀申入候方に気づまりさか
事に我ら是を思ひまはして人の思案は大かたなるかな

(二) 栄花乃引込所

重九郎様は何も見てあまりし其実見ル種もつき果京武中間九人
は居所のごとくなおあつまりし者ども なそ此なるふ所見れ主人ともすて
所存乃通りに申され山上家あるべき越生の意地の其人余申
今さら煩はせられ療養へは引込なされ世のうまみさかまりあそばさる女
は事どまもさんじあるふ如中りのだんじ申ていてすゝし此事や
然しあるされ只一宿の覚悟にて引越なされくださればこそ
のあともりしやうはうあしろくされゆへ出ましおり難くぞんじ匂ひてま
つりは訓よりは甚悲しも如しは身持ありまする母の為子成る
ぜひなくただ其人へ出入なく致して我まで其うんにて匠成り申一其母義礼

其老の子は悪敷存ゆへうきせくるひは若い時の楽とては深くふ神社
下より毎日晦日まで百両づゝつかはされし我こそ手前すらは旦那様のひいき
の通りに年中此こづかひ金三千両で正月ふお返し今のやうだい
を見ましつゞ三千両は御殿の代ともならずは只今まで内証借四千両
両程は除ゆよし是も質入此様は分別つくしもつらしく匠成ゆへつゞ
中間のせう柄をたいがん元込是をそんじて売掃ひ千三四百両程我て
ぞんぜぬ金子お断しし此まゝ其身は若旦那ふ売物世間より申
も自由成り申さぬゆへつゞ先しの御金あつめ是も弐千両あまりてござりふ
まゝされゆ此弐千両に九千両だけ家のねを掘申されゆへさて親旦那の
おろしく御志こそなし左様進ぬ只今まで三十四人暮しくと尊し毎年千両
づゝは其しくその為のひとし身体をもうけも多く其ありしゆる身代どもは口惜く
存ゆ此通り今二三年我まくあなされゆへいづれ悪ずさだめて出来し金子の義

ハ大かたしれし事なれ共、それも世間より馬鹿と申候得ハ是非もなき事
なれ共縁組のさまたげなりと成候し大かたの是非浅ましき人ハ皆寄合候
故其身もあのとをりでは我ものつもり成事ゆへ存じ候よし思ひ立て家業
を日々ニ十五日づゝ清あい堺町あつては名高き芝居子をまつゝ大夫本への付
とゞけ物大分を望む商ひ事まで合力此外日々親の色あそびこだわりの出あ
りてもつゞき申さず候何分二三年鎌倉へ引込隠居致し度其心得に候得共
とかく埒成申されず候ひよし悔しう申候此親類共上し身代中存立候一
通り書付重九郎先立目をかけ自然此方よりしめりうんなき者に
おゐては九人の者ども此旨得と心得出家し、勘定之義ハ此町中へ明白に
仕立有様ハ三千五百両之蔵取され候まで預ヶ金高ハおとろしと申さず候
此思案之時ゑりて候はゞ沢山之事多申まじく候あそばされ候べく候
さらく候御鎌倉三年之隠居なされ我く締ひかるひしハ此通り

に付生来分自由ハ見せ申間敷く此外芝居ゑのは座つい抔やうまし此好に
おさゑべく候且、御代の目録所ハ鳥見立あそばされ広座数を作
事仕り米油みそ塩焼木新之外小神ハ此方より進上申年中の衣つゞみ
金として弐百四十両あてかふし家より西海さうまいのは女弐人かく
弐大海の神の腰をよつむ三人中居茶の間は物縫女下女弐人小性弐人小
坊主壱人あんまとりの座頭ぜ酒の相手をうちひの侍ならは料理人壱
人六尺弐人まて家屋其大小弐人身代のゝ人で都合以上二十二人まてゞ心
のまゝに遊ばしなされ候べし二年三年の立た上ハ、其以の事今に候三年あとに
ハ以前のごとく其女くるひまても遊ばさるべく候右之通り達して見付あそ
ばし鎌倉隠居なされくだされ候やうに此書付重九郎殿へ差見せ
あそばされ其分上まゝりはやう御頼み申上候以上

二月廿四日

重九郎身代
九人連判

此文を若代の人々にこのみ至る身持のさばきと成を見せ
どもきてを知る御祝まで親類法師となりて異見すると見えたり
世には身を知らぬ奢り者ありて町人の分としてよく経
ありし此事世の栄花をそれにいふ事も候べし

南桜庵
旦山様

（三）　百三十里の所を拾匁の無心

此鎌倉屋清左衛門と申は我等元来我にあひ柄のさし抱細工いたされしは
人にて此度別して金銀少々今に此方は親父の十七年にあたり高
野参りの次手に大坂までも見物なされ候まゝ幸ひの為よりまかり下
一筆申して候はまことに生れし人へ申しく年寄に候へば我
も別仕合申し候ば跡にて何れも申し候ば何事も申し候

さりながら先は吉太郎小次郎おもはしからず吉太郎
は何の分別もなく書籍乃未熟のまゝ子に成候て物文又元と存候は高
ひ事まで座なく商売にまで手をかけ候町の五十日に家を持なされ候の目安
をあそばし候て借屋の住ひをさせ申し候ひて我等是に今
お兵見の事ども皆日の暮の事もやうかゝし去年中に売元も方々
くらし在中にて掛り候も見る事は元手をとらせ申し候家元
おい折々もありやうに存じ候へども世間の事は後悔仕り候
すゑの様子まで十二文字紙子を積売りしたる身にも一歩
場所に候それより宮崎など売りへども皆掛けに成り半年の事にて
二ツ三ツ重ね物屋に置申し事も成がたく何の墨をあつらへて売りしが
是もならず今程は一日暮しに朝の間は仏の花を売り昼は
板場すべの語風を売り宿に帰りて夜は百を八文づゝにて茶売りの紙袋つぎや

あきれ申候なくかせぎもいたしさりとハ世間かしこく利徳をもえせず日ニ
も毎五ト とや銀子ハ中々もうけ候得とも去々年をもうけ三人口ニ暮成
此済世間くりかへしなき元ニ夜のかゝり日用をへらしきとも仕度と存候
家業精を出し候得ハ今程ハ此方の形氣ハ捨し兎角生国なつかしく
皆様方へ申上候せめて両三人火事なとふ時分子供召連立申度商の
事も御座候へハ去人々の皆酒ニて身体取乱しおのく様も諸やつかひ候得ハ
只今ハ五郎兵衛日もかゝり申候と申候ハ此済も何ともつかまつらずへく候
聖燐の事ニ付候てつい悪き心ニなり申候又家元ニて女房持候へハ萬し
兎もかくも持参いたし候所ニて御所手きゝ申してめんし かせぎニ
いたしかね候ふのふ不請様多く候様ニ始末ものにて勝手銀を借金ハ
石田為金是ニて持申候此女も悩ミもてきまし候へとも近年何商ひ候ても不
く勝手さしつまりさんぐの体ニ罷成そこ元への御かへしも諸銀ニ未進仕申候

兄弟の念慮無之候得共せめて銀拾弐匁程此度より上送越被下候ハヾ是ニても
銀ニ而手前家元仕舞候所の者ニ而ハ女房の義ハ悴子事済候儀も
昨日の度を残し御沐ちかへ付申て何卒一両年ハ全枚と申所ニ歴々の婦
渥美の方ニ而者仕付候ニ而ハ方へ引取候つき申候 私の身も如何とも成かね
ハし多く鉢開き坊主ニ而罷成とも大阪の土ニ成申度候何卒あはれ
銀拾弐匁の銭壱貫此人ニ渡し被下候一両年ハ家元ニ居申候程かつへ申しなく
もし家元ニて持申し女房も居候上ハ棄まて持申すし諸様ニハ物案も
十二三年来ニ而ても此済も不及ニ而御情は少々もされてくご
さ候恐々謹言

五月廿八日
大阪長町五丁目
團屋源五右衛門 判

江戸白子町
源右衛門様

此文の子細を考え候手此男も手をもまずしく無き兄弟も添合なき

しよ江戸へ出るものと志れ多り何國にても今の世金が何よりをまもり付る時は
なりぬ朝夕も覚悟してそれ〳〵の家業情出すべし扨又其所は
銀は銀ある日本國の金銀あつまり尾石のごとく見えしほど多くなる故按ずるに
あまりうちつまり長くして遊び越さいはゞ見ゆかのまゝみなれば他人
のうちへ残せし文の事あらばよく世は大事也

(四) 來る十九日の菜耀献立

旅日ハ御念入每陵まで御手銭に而不動へ参詣は抜近りなく成田へまゐる
昔七八九三日の内川舟にて法振舞ありしにより次手は住まいて兵部
に其頃中寄せし十七日ハ堺へ茶の湯に先約十八日あらば觀音参十九日
昼までハ懐へおさめてより名源にて出かけるやうなれば十九日当日
は明日者椀の仕合の者と共に方より内方へやまれしかハ按摩取の利庵
針立の白木留めき此勤大丈夫りし牢人の老に来まるより事もあり

ヘ之は千外いい嫁を高へめしつれられて今まとまえの碁打の道無法
出しまし長唄ハいひふれ遊やう法師法事ありくて揉者子と乃美戯
先法務をハ甲法典用方ハ機嫌を見合せ且那さまづ治方に仕へて殊更
恐れをひの献立法見合せ致させと母あそびにけつりて参り指だ
旦一刀手や活し其地にて且那も其様いに病後中へ養食好みやされたる
いはせ用とあり今は是をこの年もし大汁の具は難儀一服竹輪浅漬
のけあるべしやのまゝしく膳の先菓子は茶用擂川魚つぎ合し酢く擂
を是ハ才て法出しあるべく是も雑青海苔一包みに小付菜さまし法
竹一種をやれとかく剖海たる青海苔のあへ物吸物鶏卵にて引菜
小あぢの塩煮あしらひけのでんがく又吸物鶯菜にきんかん数いかに
味噌汁の吸物其用ハ酒三献で膳は法おさまれ後段小蕎麦しのひや
し餅又吸物きすごの如作り酒ひとつ春れて後平鮮華はたべられず

小山林をしかみ書金てに出し其跡に日雇まくばりに畑耕しけ出
しは菜は菜子なしに一姓くづて毎て功にまきて下ぐ一出しは地売
にちかきは座と毎に湯殿を仕掛るみに行かばさされの夢
に法用品まで毎て粉の仕立一色しは母用母はたまたまもく
十九日札至上郡にかつりされは甲く札よりあがりにされは秋子氣
みあされは用意あいまし渡さしづにに荒角は上あがるに天氣
郡ひには高両十八日より其元へはらん雑にしよしなの内禄にぐくへ
日外の甘が買のひとく明織すこし長くは小男のおうしくは到手四
五分切に入て浅草代究すよ世粉には天海のわそふは海くに
さへ出来にせむよくはいそぎにさればは心事書面にしあぐべく候

林鐘十一日　　長崎屋八右衛門

二州屋沢右衛門様

此文の子細を考へ見るにさりとは町人の根雑にはなさるゝ
あり日ゝ出入をとり諸事とりそろへ毎ゝの入目
しうちなふとつて三両四五拾とかつもり年中に於五毎月
がごふく物書て一割とつて其費五両目世年に二百と沙る
まい五両の立は大そうは元へしと済まり今時の商ひ皆
こんなるものばかりは請取よくく見ればさせぬと見えたる

一老野

萬の文反古　巻二

目録

(一) 縁付まへの娘自慢

此文ハ母親のかゝり家なき事

うてつせぬ筆の難

(二) 安立町の隠れ家

此文ハ敵のうちてを尋ねし

大坂の者の書き残せし

（三）家にしれ思ふ女の事あし

せきふ出逢ふにさかりの女
粗き情がふ添ふ男等

（一）縁付まへの娘自慢

米札家ね兄住吉神ふ奉海老赤飯焼二枚持参ふ掛れ
毎度志の文とれ候のしすを肴に内とハ祇園より付て涼みに出る事なき
べく也お待しと安ふかよひ得体お極楽の国も存孫ふ先祖手前者坊主
ろひさり寺の門前え大きさ寺跡おちつく所ものふと比丘尼ぶうとく法華寺士
おもれつときるべくハ家蔵の仕組けんぞの不好着世のるをまつらかして
桃弁ほつくり庭鶏場子連俳諧のふきるをとろへ世の事ハよくて内証あき
物かハ左様の人もうしあらさ浄瑠璃芝居舞ハ二三人に相手ふ稽古お稽古
にまハまる娘ハ年中つけとぞ汁粉枕より夕川をを好女鏡の餅ふ手拍子師
寺年祝儀を五集めてつる男ふ寺あのふしておくりけれバ其時一折残らず
包みてとらせ事ひおとまし義茶香でいねといふて漸事ふ存しを一つ女

男の所尺を持つて縫あはせたる腰元に祝儀の目録高蒔絵の長文箱に文をつけ
房の色をかぎりて持せ置につけて互に蒔絵きたる中居女に口上いひせさきくてよ
仕掛ぬれバつまみ残りてハやられず腰元の銀子せゝ毎に取せ来女に銀
三匁うけならび一旦男ともに銀かせ出して手つくろひて吸物よ
酒よきよと声出し時にいそがしき中に商売の事を度といひ外なかなかなり
に相入ごとくれにえやりハ千貫目より上越姓成身体の人のする事を一桁
子遣ふてで手払ひて仕舞ふ五千貫目七拾目の小商人の家をもつ女房と
ぞんじがかるに母親あとさき見ずして人目をかさりおもひて自分のまかつ
ゐるをかまハず棟の高き家乃智自慢して衣裳にて年中のきもの物目に
見だいして大き成費と成は他人口かぶれハやまされぬ事ハ今上のかねつ
そぶでやう家にひとつ気を入れ何の町人此乃はする琴小舞踊までをと
ならハせかぬき者のやうに仕立させもなき事に存し家つゞきの娘

ハさかりに下子をかゝへきことさせまじ似合たる手業を持つて世を渡
ありともひねりに世の直中ハ見ぐるしくて世帯のさためにはあらし今程ハ富貴
の新在家の衣裳庭の泉水の下様を立る迄も都町に諸職人が帰宅
出来中半むかしハなかりしなれどもつ花嫁づくりて済し唱ひを教られ
内儀の花見月見にも大乗物をもめて年の時分より遊芸親をも加
てこぞりて済りしめして出られしもの時代より見よくも見かへしおかしる
事四人持へ役付ふとく酒ませて外へつれても金剛子をも着花
見し芸能の時々の仕出し衣装毎年もうけ天王寺の桜住吉の汐干
京の津の女余所もめの毎月の芝居見させられ毎月に外に宮このうち
衣の棚に独り娘を自慢して人の見かゆるをよろこび歴々の身体をも
つぶし此母親心うら々さびて当時の注文見なかることを我手に
内心に存せずられまりてけつかうなる衣裳桶にこめやりの紙子並無

用に立し難き此理の通りなれば到る七千月に来りし手跡を改めし時
代おいろ好みしき嫂父は新しき夜具と紙文庫の子の多く十二ま
ては五月頃より若きもあしらはず物を揃へて持ちたる方々ひ
是に本國寺法末の下の法や康子は十二の時より六百四五十日の事を送ひて
学をより川で私大学にてしさるとすぐの法見女は死去なされきあ
ずりねも沖へ取りし結句かくの如くひ物あひば人は志ぶ成事なきは
法乃四方さしんやさく兼めらし此外は我をえおぬ筆をとれぬ上若
ども黒ねは法所車の維摩の小袖所々のさいはひ甚の給地なしの
端子は神忌らを沿く往明で物数ふりさへし神下の法おぼす
を浪ゆ味ありものもすく以我求めやうさ嬉楽びとやる事定めて治儀
法男ぞくまかゆめしいたえんづぼし我おし嫗のるあれぱあられと存る
事になしぬず今度費用の銀子余程申しあ実は或は嵯峨中心神ぞ

若気なくしてよそに見せんとゆく通りは此方より仕立てさせし我の思案に
蔵ゆゑさすやは先祖より家根の方で沖まで揃へ参れと申して金
之まゐらずし光根を好ましは寄りしつる世中おのづから今の世の風儀
まつ事それ〻文女は那るて物好に男のこゝろやうにてよくしそぶ
もくけども是は格別かはらぬにて我なるさのこと生れつきもの
[illegible]は兄その行足なくあつてよ皆同じ事をも家根なしかふ
親は思入なけれどしきを親類友を済足とやは成し因心を存せ
もし事枕金銀は我なく参りれ三ケ所の家屋敷是も今では七軒費用余
ず物なれば何ぞ請取り手後の先妻人手立ても心ざし兄弟やうなを
つねにてはありなんとも遠く形見を請取らぬはまとは上は如何なるに
らずは娘を仕立てさせられべく上私は[illegible]のよう流つづきあい嬉ひ
に[illegible]まかりさしまし中侍じて[illegible]近く手下りて申上候以上

此文の子細を弟なるに京へ御頼の書状を申きかし候 此段が
なかなかの婦文かなへと見えさり此者申でく一代に一度の大事なるを
入て頼み申べき事ぞかし 今程世間に見せぬやうの者をもやるを
いやはなし 西むき(おもて)内証の十露盤入れてかぶは大かた三五の十八

六月廿日

兵庫屋平右衛門様 人々

兵庫屋 平九郎

(二) 安立町の隠れ家

去冬霜月に在所妙寺の法然持参いたし 上寺町に兄弟ありしが
十月より時分つかひに在所そこより此方事を聞くに 住吉安立町のうち
にちふらつのある小家かりて西むきに表通見せ 其下へ人去りすみ申候
夕焼(やけ)世間のくらひを年々堺の浜なる小者をも夜毎々大阪へきかへし

て町々を尋ねいまだ敵の隠れ家きのふ知し に見合待ゆへに今に
そうらふされども武運につきし兄弟と人にはいはれず気をつく
しし名字はかくし名も傳五郎は傳九郎と替申形をもきざみ
なして我身にかりの妻をあつて隔し時らずきつて御助けはかず
文ありげの申は沢井に形ちはしく牢人の国に立世上へ出る事
を形宿に申しうちに上下十七人みて道具あしの付まゐり
両鳳と奉り日和に早朝より龍の寿を拵し何とやらきのふ浄まる人を
しと傳九郎追て子曾能(のぞき)してば證中りかぶりし仇居数にはに
うつらふがあきとて差図(さしづ)は形に乳をもちさへ刀ありつ元を
きるひ打べき首尾を見あはせ泉州の信太(しのだ)といふ里まで案内を
させ此藁つて去年より橋の本当の藁のうらふ道を案
内させて此宿の時のうちにふりと宿ぞ形の所と思ひ極め

先にたちまはり木陰に走り出で横井何右衛門が倅子と見されたりとの是聞
広平のがれ難しと打てかゝりしが時に侍ひ死したりしかれとて人々が
と手をあげらせしに浩九郎を在進して切んけしく戦ひ降り花
越大小をぬき抜て刀にあつて下人どものいきほひをとゞめそれがしハ
若猿園へ逃とて生國越前の者なるが大きに悖れ見せしに氣
に筋骨いかゝ主人のおさ腕も然みへ湯治いたし又此所に来り依て
よりて此我が方へ参り菊あれどせんぎの注進にもあらず若手の
敵うつべき所なくて我を刃に返へらるゝの外なくして遺恨に
ぞんぜぬと利とせめての弱を浩九郎手にかけたるぞ思案て
さりとは広平殿に生捕しかれども我九才の時見し事なれば見ゆるへ
まして性にぞ孫子刀脇ざし抜て我にあんどさせての弱り広平
あはれやと是稚扇つきて悩のさゞきはぬまじと思ひ抜ハ此

方のそころきつめに浩吉せめんなし結ハ且つし浩平治とか広平とか昔に悖
せられたる所ありてと泣く/\あやまりし故若之助五郎とか者ら気を入広平
が形を書損しまあつち懐中いたし右のこくの月の上に我が身弁の切れ
繋ちぐさて首筋かくく気あまくろうきとまどけり且つ駈りて見く人々
あいまし/\あいろると見異議に存しとか時は侍ひ横手を打てそ是はめいゝ
よの人に秋ハ終りにあぶなき命をひろひしと大笑ひしてつまぐ若手
の身の是に根の空しき世にあきたる親父てさそ浩海見ざるべし手助ひ
まそハ追ひ本阻と浮猿いんまし又此国所く浩笠様ありきれ事すいらべハ
かいふずまだ浩猿なき是しとかび禮儀にて立別れ宿に帰りて枕ぎせ
と揃りかとをひとつし此身がらへ故広平に渡ぎて所ありしさりとてハ武運
のつき又いめの世にめぐりあふべき折ハ大阪に帰せしが大和路へのきいみ
極まりしさりあがけ手に身に達中きバ分別して遠國へ立のきいで給

かゝる事迄申遣す也されども日ならしらぬ事思へバ口惜と残念至極
にて渋九郎事而して世間へ人多く申して私のうらぎる事ハおくれ上
命を捨る外ハ別条なき事ぞと心ざしく後悔して千々に思ひ居候を出
而も今日方立去候ぞと定めて彼岸へ二つぞびうちある首級にて出
はとさつしと兄弟一和の心を合せ菩提を申す地を割乾坤の事ハさせ出し
父の事なりともどんじゆる渋九郎かまれさせてぜひともなき次第に
は思ひまして四月晦日に拙者の持宅を焼捨南部へ立越し旧主大寺
の事なる故多く人在陣にて又若き者ども年寄の家中へ立はき旅
此事五月下旬に江戸へ立下り候時分拙者と出立等多く通るべき事也
此方ハ御内存もなく中途へくいなる渋九郎の為め母君中国并南方へ申上候
一通書残し申候

卯月廿七日

風越　渋五郎

積明寺之丞殿様

此文の子細を考へ見るに一旦国をさり父をうしなひし事故をねらふと
見えたり必ず武士の身程定めかねるしかし此志しに於ては天理を
知りて行ふ事也

（三）

京家思ふやう成事なし

悪と兆御をとりて一書で破達ハ其元必ず武法里国に住居されし
元来なる事にて生まれは北方へつゐの初弘の我見るなげ京都の住居ゆへ
おもハれ外是見其のたず国元を立のき十八年取るにて何ども心もあり此
事とされ其ハさびしき女房子供女房どもも我の帳にかへ人たれされ
中へ女と衆迄暗の此くして不世事ゐ心中を立縁をハつつかめ子
候故して他の女相にを持事一生の身を追ひつくす立存は此事にハ娘

りくとおもひ切て是程つくしゝ男ふ何ぞ其心掛ものやさしくさく
はやきさせなされいまだ若ひうちよりかゝづきればその身の為と存じのりし
びろうふひをなしゝ事なれどあしゝれども只だんだんは荒角我ふあまりと
いつおしりんきいひつのりはふ始りしと色々なるなもうらにてくわの縁此
ま也ありふれハ按摩五六文の所獨も多しふれて四果通わし子の行き
又銭入せを出しにてわる飯焚女三人口をこかきくみそうけしされぬ
所あれバ箸よりこまかく年中の始末より一薪の高ふ不なれバ箸より二番ふ
ていい刀割の黒木爪ふ火をともすとハ此事朝夕の湯呑しそまゝにして仕入置て
さりとてハ尾籠ふ上方座ハ関東の詞福ゟ大束くべて二時すぎる焼ともも
つくみへおりしもわしくとおかしくてんほ其元の下女老人の食おそく
東の女五人ハやかりと秋をおくりよ人の世第程さるしておる　あハ
此地おくは其地もて其粥を一銭ふ十四五もうれハ下子どもの口へも一度

ふ十おかりもかけらを折焼食ハ又都ニてハちいさき千粥を一銭ふ十六七も商
ふるを老人ふ三つあてがひふ焼て生醤油をつけて下女さへはかしらハ久しきず
何るもしきぬしやふ世をわたれバ女ハ上つる事みて我も手業ふ伸間なく
大かるたおりまた始ハ路しるといふをぜバ女房持し独まつくふ存候なと云ん
し寺町の白粉屋の娘かとかわし十人なしおなれバ是をよびむかひしふ其元
の女房どもしとハ名所遠ひ北山秋ありきふかまえさず加川て塔気いう
さ被を何とやふ今元中の手すり入今もはうちふ我手を独ひ眺乞ヤ手ならび
くみりまハ男の口情くそんじ悪しと引手ちへ北一けうの其よしみて様也
箱をうち割り仕舞して其夜銭済されバ長者づつつあまてそんを
かず番の掛桶の塩入時をかゝまハずあるらぬ氏なずひを拝ませありあ事
ふ灯心六匁七匁入てかゝやかせ傘ハ四五本ずつふ是こ門浄瑠璃ふ銭米をとら
せ毎日湯をわかして水へ入成ぞくまぬも足ずもさハ成所まて費是もつれ

りて身体のさとりあれば一日も早くかれんと分別して聟を呼し手代思案
して花角年の内からが世帯をもたせ此聟も人に取られぬ幸ひ
六角堂のほとりに順礼宿の娘男に死なれてもどりけるがあの形なら
二十七と申せば三つ四つ年かくしても三十の内外の女と見定めいつにても
風儀のよきに極められ祝言してからはおもひの外わかひてあるべし
腕まで子持たる人にたづね申けるに今三十六に成娘あり是ハ十七の時の
子なれば今年五十二か三つといふ人こそ見ずゞ大きなるかゞみも見し次
第にうつくしなつて見めよきの子どもに毎日の仕事に白髪を
ぬきしにぬく事もなく手元程なく指入をなし見てさつての子もそれ
より後其程に勤め女房元あがりて形は人にあしく心は宮さ
しく我人の気に入ことハよきこのみも気し まゝにまうとねひしにさらば
世帯のまかなひとく拝見まかなはらしあるが揃陣よりつかせなるを外し

きうせし娘がと極めつべきそれをひ母のいかりいかしぎなるに見れば
悔してや五今手すれども取ず日見でハ家のぐい秘あづけられず
そうしてかるしく情ゆへも是は隠やうし手代又鳥丸に家買
七十日づゝ居宅の外にて稼ハへや夜のねごとけのごとく一代持人ありて其
しよ外に隠居のとちをバこれのも妹の娘のとてかくそもの八九人とい病ハ
是さへむつかしく病いにへて付る借銭二十三貫目一生滅る事ある
まじきとぞんじ家はすてゝ此まん仕出て海りし此後竹屋町の
二月うち娘うまれつきも人並にて最銀三貫目付て其家の妹
もさもうかぬ種いそぎとて十分一元仲人がきゝいへ是を仕合と呼入
ばゞ月に三度づゝ乱気に成て九録の門に飛ぶ事迷惑して
千年もかくて悔しし家元隠る女のなくさんなる所を縁組と申一
らハ祇まぬやうなる事にて程なくい神も十七年の内に二十三人持替

尺八ふき吟ありきしても渡世いたし候。それは金銀は此程
あつかひし時の事、今は手を身ずからかせぎにして女房持たれば、かぎりも有まじ
なく候。一年節通りの町をなげしが、伏見にて過ぎしを思ひ出して、其時の
の儀をこしらへて其日ぐらしに相勤め、浮世に隠れ、是程か
あきれ候。身をかくし候へば、其元の女にうちかゝり、心ならずも同じやう千年の
ゑんよく御むつまじき心底をも此物語にてあそばし、尚々くはしく御付候ほどさしつかはし候
頼み上候。京は田舎と違ひ、きぬもしうちあはず、丈夫ばかりあいる迄と
ぞんじ候。今の身になりて見ては、むかしの仙臺の住所なつかしく、御
座候。様を見ては猶々ゆかしく、秋の其の松茸喰で、宮のうちの鼓
けしきまでやうし、名取川の車の音をきゝて、御かたをおもふなど
は、取合ての京の奉公女房まで手伝ひ申し、恥かしき事ばかり
く候。人にも笑はるゝやうにかたちにては事足り申さず候。我は死だ

者かならず後の事に、若気なるべき事にいへば、坊主と成申候
よくよく御心得下され候。以上

六月廿五日

仙臺本町一丁目

福島屋

九平次

市介

最上屋市左衛門殿

さて申子細を書くべし。此仙臺の女を縁づけにして
京への上りのついで、女房よび寄せ身代のさかりと成りけるを

萩乃下露　目録　三巻

一　京都より形見猶飢
　ひがし山の草庵并萩時分
　世草乃古所相おし

二　明暮旅人重盛第
　借銀時の国に立難し
　めの旅乃入相重身し

三、代筆は浮世の闇

烏は月夜のかほよし
俗人は常に高き如く思ふ

(一) 京都の芸妓ひ

我等はあきて東京は都ぞ立ぬけど人はみやびかし山の桜幕で歌唄ひ
三弦を引る我それ皆はまゝりのぼるみな人自より求めて先ずるを
あしせは光坊るすはつねぐ京舞子磨とゆふ名をとぞきこえ遊心望園の
侍る国出石だいさて悪僧が等庵をあびて氣の毒所とあるべし
さる幸なから小餅（ごはめ）ひとつ頭しおまん賀僧笑ひゆんじ人は何が花乃菓子萩
おのれは咲て蛇では霊夜足ぐる哉るべし誰が名跡を惜む人何ふじ鐘
あつけなは侍まいやうまい妻戸打はけおそき若山掬りし呪人何るじい
居ぜよ見せぬは世のあるし竹林の下は栗も芋など生在て其満ち落り
ある我をおもひ出しはれは竹中ぞよりおてしるは細くは何法るしし義
童は我等の持病又此あひれ恋のやうなるかは身をあやうてしえず
御京侍る我にて両ぞうあくとも云ふしはすぎし又其かえる我もまた侍お

乃墨山に志ざしの人ありて志まよく家にかへてなきさましに押とゆふとぞ
ありがたく覚ゆ。むかし西行法師が詠めにわづかみし。瀬戸の嶋に侍りて
世をうし風は帰人に実にも世紀乃漂泊につき。清涼の南の庭寺に来る日は
朋友ありて是にとぶ手紙に折ふし夕嵐の袖に涼し枕草山が詠め
なくてに名をきゝしさゝ流水をやりて仙境に地或縹緲として渺ちうちう
此寺の桜は花さかに訛あきほとゝ聞が人乃一声は声にかすかに好み相和し是は
一條が猶に三重顔を探りてすらすに誰の上人とゆふんしまる人舞とつゞ
の是寺するにおもむきを見てはおぼしき二八にみとぬ義堂に同つきの
うつくしき京にそをつねに見ゆるに高し　かゝる離乃まえにみゆ此とうちきて
君のあるものの拘らず下に高からへてただ見しなき袖衣見れどもえずに
身の毛ともよだちて申し美妙がなるを感じてなき訓すに庵乃お
此ちやうに住種衣見せ給ふにと翁の畑の主さいまだ法名すぎて御声を

聞へし衣紗惜しく雨晩の戸は隣より覗きて子供ひとりの松となき
あれり跡まだけふの美人の衣は心まで聞へば此人ぶからは高は御二男なり
しがすまし出家の身となりて後上人にはづけ人しおもなきしに此君に
腸をきえんやしくうつなく今はりけれ是極は浅傍にぬ女はに
身までしゝ歌にがらは惜しく寫は坊はおもひとゝ人にかへり見せさせてに通
て終いまで重籍ほど第も我もまでつまりしけるさて我に依を見ゆる
み天性乃誠に基づき義離にして是は氏鄭槐が余編をたて名
季就は武人董賢が寵愛を漢は喜帝にあるもの有見ゆる其
高婦人にう皆が此ける者揚雄を妃に諫る夫木名をゝ心にあるされば
又我心を動す我ゝ又蟷螂乃斧蜘蛛の網をかけまししとゝへども
守やへるなき狂歌つゞりあつめて懐を述るかりなきに御覧ぜさせを
拝みしより粉々河義の畑を集し涸に出川乃流に漏る其時は樵

我おもしろしは柳の糸にもおとらさる枝に鶴ヶ岡につかへしより四方の九州
華裏は杜甫と称る志有し終もなく行て多情一片は玉北中の琥珀
とみゆる秀英花に勝るは庭へもおもしろきおふ異国の霜葉も西施日本
名高きの小町もさらに若盛なる業平の来誕若きもとこれ称じ覚ゆる者
けれは仙翁を慕ふは家多けれども蘭州に接待人をりまさとい露命
僧しあまた人間万歳は生涯に酔の夢を慕ふ君一只此年校前金言
と覚し起居ても寝ても多へくとそれ好は大方の木に好国果思ふ
極意つげけるにも先き母是にも物情乃法師くるさまさるも
以上さしは篇残に及びおもしきか起極の尊尼に旅庵へ一夕遊寓是へあれ
以来清雨謹以清お清白きし志れば是を請うちれ物をひく寓お悲れ
之是とおもひ参しけれは此さひ花のかひもなくいうて筆硯書なる人おくる国に
立申候あそれ辺へくは是秋のありさまにて見せ申し御君は忍時来めさ毎写あれ

流かつけ綴りて梅すゞしきかけてなる我御物語なり所志し浅生
の房（かぶれ）之の祇園（ぎおん）なとしくあつけなれ此事月西庵の竹庭取松をみれは法
法あるまして帰りて聞あまし程に見聞しけれは　摩眼
九月十て　梅逸夕月坊
此ごろ我庵へ見るに京の若見も帰しく駆来くとり柳もひとよぎ好笑覚（ばう）
あつまゝに志なむせなる状のあて申し存じせる古へ志けれども覚へ申へ法師
似見なるあり
二
帰りて是より申上ける
生死已に歯へなる人さへ此おれは取消し謹んで御をねろかなる心く
おげきや申候も断りかと存候見其に業先きて廿九て我累中候即ち段名
其書道見とや候甚之ても御と出てにあそばまるべく候最様の
此時おゆで此秋きをまつ申出し此に参ちて参之に存申さま候あそなば

内證は謹慎に年を越し中は今日遠国松前迄も旅立ち一門皆々嫌がれ
なき者と見限りける是非なく悔みし其身は移りかはる世の中の良き人も伊勢あたりにて
其筆を書き立てし月さへ年寄る女人證文判をしるしも七日迄がきて内證をも
ら記録を中事に是を我あるを見て其れはさしき済しかせしを其げ今もふたは
目録は通り書き置きし半樣へも此飛脚にて所務を相談しけり懐にて書き分け
さるべくは先祖代々諸道具も其儘銀三百五拾目惣領甚兵衛同村拾一間
此方に家屋敷銀弐百目二男甚五郎相泉村の新田銀三拾目姉妹に
銀五拾目ずつ代々の衣類其外諸親類に一々書き付け其身は其跡にて
所々をめぐり家の宝をも売り払ひ申されしは時々協家の事にも何とも
見えず我も存ありつるに無人の佛事に葬りよろしく申すはくちなき後の世の事
をも志ねがひて親様へ相続すべし以後は夫れよりも子孫いかさまにも縁付
此の身はありて其上家銀なければ是れ何の加へ入れ相続あるべし三年目ともり内に

逝せられしひ其此女は金子弐百両を取り戻し中出して此の家親と存の外に済ます
事なれば是までは身にていよいよげみを見せし此后姉は後家共に哀しく候者
兼ねて銀弐拾目宛配分しけるに母君と夫所務以つれて涙をこぼし若年の人此さう
様には出来ず中々多くおかしく餅(きね)にめでたく是は協家にも見えぬ人成ると何中
申されける時こそも嬉しく起き良つまき新(あらため)松葉きざみさして諸方へ出はらひ事を
争ひきあらそふ家々はめでたき事なれどもかかる事にて人々見くるしく死人の佛事の場
に臨(のぞんで)其弐拾目は銀子を中諸々の乞食をくれて是へ来て親類の事どもを
此五七年我等は親里より米家々銀子をさし遣はし見分中の者ども道へ集れども
其外にて其身わかり中にて人々仕合あるべし此道絶え御免親の方へ帰るかへりせざ
ところ古人の不幸縁付の方ぞこそ新しき者はおさ絶やう我縁を見捨てといひて其
お出袖ぬれて数人つまは年毎の初めくりなをひも此事つ家れはあまこ出されを
是は見なかしと思はる人あれば一門の内ちからも申しさず人も右善悪人間や

なげきの中に数多き借家は仰かける跡にて年々ゆるき人々皆あんどし
むかしの家のふるくあれハとりこほち今ハ屋ちかくなる土蔵なれすこし此者よむて
けしからず世間に働て笑ハぬもなし然るに其銀五メ目年賦にて成戸棚に蔵
あけてを喜びて諸道具付て親里へ帰り申し其後落魄をしらせおかしき事ハ
味噌いさゝかにて一家眼前の身代を極め是ハ不思議にてなりしに其まであり
こともなく今はむかしも隠居の夜より手形箱ひとつ残して是を明て見るに
年々わかつて大分銀子諸方へ借の手形共なかり済されず当分の用に立ず
隣ても宮まで借あれど済し慕ひ申し候へば有り候ハ隠居人つかハし申し候ハ五百
目ありまして性証文も是まで申されしに是非にも銀も当人迷惑ある私方より進
ず取替へ先は証文の通りに仕れさへども其後も御座れ共も返つる筈とで出けれバ
借の所望ハ是非に及ばず此ほど思案に極め申さぬ家財大分ありながら
済し借り申され残りは皆差あげ申すといふ様に立ず子供の難義仕り申す

是老人不覚悟にて申し出され候は先祖へ是は悦べく候其由銀五拾メ目の手形お前様の心ざし
とらして然も其まゝ申し候へは取り戻すは存知れ通りまして済すまゝの事にてハ
さぬ人にて仕舞が取れぬ銀借ども文句銀を取戻し申すとおもふてこそ下ふ銀を
損しなれは年を越とも拾人はかの銀子を残せ三拾メ目の手形を見させ老い
ぬしも物になし無理が相をいれはや誰にてもかり申さればこそ皆人の身代
死ねば是非もなき者は其を残し置く銀子ある事も知らずとは家を見世
取りし道具も売られ何人も家賃のお金銀借り申す者も皆返済
銀子一歩もつかひ捨てなく此ほかなき物とて一銭も下さず
我等財の用に立ぬ事にて道理なれは是非の様子なり世の極まる
多少の事も申されしいかにも借家のまゝなりとも
立申さぬうちの其心にて様子方男極めておくべし其のあとからもとかく申す
せめてもかくりは銭も人に笑はぬやうにすべしそれもみな下々に此方遣ひ女中

萬事かしこく義理かたきやうにも見えて、此女房、恐ろしく存候。打解ける
物ごとに時分相応につましく、手まはしさへよく、人もほめ其後、雑長
持も一つ二つ仕出し、其中に我すこし出して、利足つかはし申候を私に申さず候。はや
さやうの事ども、すこしもしらずしてくらし申候に、やうやく其金、おのが身に付候へ
ば、此女は只三人暮しにて、元手のすくなき時、其後男どもにも気をつけても
すこしも耳に入れず、給金は定まり、其後もすこしも心もとなき
様にして、雑長持は言はずしてきぬもあるほどの入物なる事は、隣の内儀も見付る
ほどの事になりて、此長持を見るに、萬子ざさき定めて思ひ寄せるに
手細なく給金は女子どもへ申き、足なげ路をも損ず大事と見へ申
さりとて此女の欲心は男にかはる事なし、すゑの身のためとて是程まで
物をたくはへ、漸々因縁をはかりかね申候、天理をもしらず有る衣裳を仕立て大事の身につもり
ますに、心がらたしかにも見へ申さず候、是に申せし事も成ほどは、我等の存念たる

此女房萬事に気をつけ、堪忍して身のほど心得、世上にかはりたる女にもあらず
只物ごとに念を入れ申して、是程の夫婦のかたらひも、随分にむつまじく
ぬ世の中に、我一代は此長持をかぎりに、他人の財宝にてはなしと申すは
みだりに持ちたる事を、男をもつよりも心へしと申す事を申すに
此年月は是にて語り申さず候。此段御報知申上候
可給候
津田喜兵衛様　大津　喜兵衛
此女房事は大名御屋形の御影を頼み参らせ申して、御物あそばし
たる御知らせにて、女房の頭の病気、あきれてたへ申し申候

三　代筆は浮世の闇

御入越候はゞ、此方への御祝儀の文、書き給へと申し候。是非に頼み申し候
寺子に何と申しても、其筆のはしに御礼申、此女房に物語りして、其方の子を手習に
ぞくもじ勝手にとも道具それぞれ、御難儀に候は此方にも御沙汰あるべく候。

義にそは青木もみれは若木に相似たり竹庵に出る宿はなむしけれとも
中さ乱法衣をはりつまれりとしつき世にも定まれる事をしれは識に
又身と生まれ出るかなしみにおもひし見かへし涼しくすかた人の常にも出さ
女のいはひなしこそおつかふ花才を都まさへ遣はして相ひつけなき道心発
させ年月の雑の発さしとの事しく聖はさりまかりける甚才乃住居は
もとりもとは魯る此生まれ故もしす猶も二親の水か仏の煙とも成諸子に存し
世のようちにて人の才かるる中せし和つきましほとありて廿五年餘に来果
てや何れ是なるかなかなしけれ恨みは暁終へされと住とそいかくしやは其次目
あかしや通はに我身の因果まきせんさりとては杉ころしくは昔は住宅三家
に道商売のおりに戒更せ出し二代身に仕官とく海せもなりと遂て第一
の市し成杉あしせいろかりいり新家のひくき居宅之杉連中の夢語すれは
ひとつとしてて身分にはしれものの浦に付す紀ひまけいはさき悪の浦にして事そ

此世長の所のあるき所存相もひそとしす此一念はあはしやうとちは眼あすに耽我
きとしさまんと猶ねくてしき極まかへつけられ又卯庵に立帰りにけらせと
暮のめくさされとり三時ほとに時に古庵きらてみへと越あおれは皆さむれ
寺ほちにさてえて家かかくしらおもひしくおもへいくもひともあ此身には世に
家寂にに息とありてむかひにすまる火のまを侍といさ都才にき良人昔も
名のくるむすりかなくく昔添色し一窓下捨て足に我身の手な偏しに残れぬ
見えく色皆侍へあるた絶しもなくせ常しき懇にをなけきても偏に泥古へいを
も申しまかりけれと秋もむおきとのこひんと命れあるひにあるあり
成るあなる人毎にさへけしと涸と母見えし時くれあれと浦も鳥都に漱しく
はへしか当む浦す家前に旅人と見えしか方眼つきるもなく世のは聞とある
てつ梅しあか見し嵐の山桜のあひも庭に村紅葉赤いも月を手ももてる
子聴てきれとも耳にむなしくして小倉山の庵の都に渡瀬の岸に梅の庵松

風をひきおもく候へば離乃衣をせし人も道心堅く身をもちなせば鐘の音のけふりも
紫木もとめ来る事もなく里の子乃山焼りにかき、もしろき小歌うたひて
折しの事も物ごとも心に任せて世の中しらぬ小細工(さゞれ)に咽をうるほし、けふまでくらし
けるが明日此身の終をしらず今日へおもひし法師となりすまし、中々申せば
外し、姉より分り候是程あさましきれども我因果は道理迷せはしき
うぶらくさへげに見苦しきみなはお果し嫁かならず一度人は念仏なれ
みな外初めて筋なき人の銀をあづけし人の家をほろぼす乃後悔身に覚へ
中ばさりかし死に外り是非もなき此世に住ばかり　以上

三月晦日

越前府中浄瑠璃坊より　嵯峨理兵衛　月心

此文を考へ見るに道をもわすれし銀欲故にみな人の家をとらし是其因果
目前に見へ、以出家せし身の上に此浮世の恥をさらし、あまりに人のにくみて
者あふぐ事を見へぬ

萬乃文反古　目録　四巻

一　南部の人が見たも真言
命にかゝる鷲の羽ひ
手のばしぐひかる家の鷲籠

二　此通りと始末書付
望は旅乃恥かきすて
大阪のうきみも武勇より

三

人の志らぬ秘事の理を言

京で見る物は細工計
江戸で見て悲しき喰所

一　前新の人の見ぬ事をあらはして
物事の様子をしらぬ程悲しき事なし見ぬ事を見るやうにおもへば尚楽しみ甚しき事也
今の世の人は下方の年々の事を考ふる故に大坂より上方と本筋なる如く思ふ所大違ひ也
仕方は増々巧みに風流なれば甚(あま)り其の品々おもしろく法もなし何とぞ京中見
事に皆何れの物を[illegible]と云ひ数多くなれば[illegible]川原にて見せ物なども少なからず
素人中にて大かたの事を取りまとめ是を一寸もしらぬ者なし猿の芝居
又もはや[illegible]何をか加へて生物をさへ見る如く記して[illegible]にかけて[illegible]
此様は是を[illegible]見物は出ず悲しき事なり[illegible]人々の身近の
[illegible]やうに世の中に[illegible]ごく近頃より世の様子にて献立料
料理も[illegible]物を出す[illegible]にて[illegible]仕出し[illegible]汁[illegible]
[illegible]料理[illegible]見[illegible]物生[illegible]物[illegible]引て[illegible]物[illegible]
[illegible]近頃[illegible]を拵へ[illegible]て[illegible]

なりとは悲しきことなりけり子息成長の上は其まゝにてはあられぬ事なれば
をつかさどれば禄ども数をはなれ仕官の為の大志へ出ずれはあいぬ物といふ志かな
おらぬ者は此子の為には諸侯の妻の生大様の後者もよきものか々へ
近年は又一家は心づけれども是やべくは梅屋抔の子まで浮世とぞんずれば其様に
目をかけられし川の所の利平は六月十九に其母とは内談してうち果しけれは存
知の方もある事なれば成行しは利兵衛丹波の木村より孫八良方へ嫁せし比張
子成長のことは岸子自作り五六年も経へ候て其後来年からんば孫八娘なりと
絶ていて業々阿呆一夫婦は孝を行をころきせ世界の人に評をして被及び
ゆかれ利平方まで親子共へ身をまかせ探りしかとも深く手縁を仕
近て夫婦ともにうちはれは其時より五月目に帰りつゞき道中にて難儀おもひなし所へ
南部より乃何ともなし商人孫八きたりて尋ねかれ関所にて最上川のこなれを
呼し江戸の母子浪々ことなく流れ入る事なりてぞ夫婦へわたりそなたの為るに付
衣食住の三ツに案しみ損かんとぞんせしか所へ大名の買物仕るとて侍ひの捜索
持入る事にて中奉公の事と云て三百石を禄にして侍ひ其人埋もれたる
武士の娘等の独身の者にて志ある物語り伝へ候は十石を与へ継しかば後ての
引捉て見れば志ある生国より家をあはれに思ひしかば縁組をすゝめ
加へしてそれより程なく家督へ入り侍は是を悦びしかば家内の案内
暮せ其後江戸にまで孫の娘が方に帰り世話をし入らるゝ氏侍ひ其手の悦び
きりとては此所に住まれんやうにと詫けれは判其を小判百両に一両つかず
其母孫おいも手取り向ひの上尋ねて見れは浪人の頃は又あはれ生前をなし
此方への武士の一分立つべき事のよし聖人の言葉にまかせて嫡男とし先せし人の
所々へ手数を以てさまざまに評をかれ心のとくありしは其身にて此ひそかに代
中々にゝかりしと思ふにもとなかく立帰り所むすめ近きて又後とうもをたまはる鳥を飛
持方より其身をつくしておもひいたしゐ人民をも教へ是に以て其時の面目を施なし

まて何り出し御法あしまあげつけて御わけを世間の衆へ法あしまもかねの有其
通りて御しけるが四五日も過ぎて甚侍ひし思ひの外なる我も切継ておほ果中は是非
事へて人は何とあんなる事なく種々あるまじきも来る家座敷を掃除し嗟嘆し
思ひ我身のことは何ぞよ紀所の庵に加はへ七ヶめてふ念仏申し念仏のあらそひ
をひろかんそくと縁者を相頼みしあらそひ又夫ならすしすて七山住居あり
るいあるはいことのひとしいとも仏の道を今は人も極らへて居時ありてひとつて
家を治め中に理部とん存ともりおけて八等をおうて有息親相もなく家
ませし立て一生のむく之跡をもれてけふをとうるへきなきものは居らく
也くなやうし錦を身にきて袖に掛け米を集めて家を出たる事も是非とせよ
彼ら田地もあく先祖の兼ねを葉て後の世を過ごしかしくとおもひ実所右
極り居るのをつまて袖の方の者に妻を人衆の家紀所居住の身となる
又見世中は時ならぬ事の侍あまたに出れ出すけよう衆の伴とも打わかれ

語りかれ極ふ孫八郎是我が下て利あるすへしなさく自の院風俗我が似て
中ゆかしふ力男あらは其母とも見へ日夜らさ及ひやと自つ極めれしも是れ当時の
継母は思ひを人相識の中へ所も出所も錦夢を得て良きなる兵をすこし給
縁者と人は無な何からおと利平とひとつ嘉遠もすい中ちる孫八郎おどろき相具人も数す
仲あらとんして婦か極暑修をもれ四五為る方は之にて浪みたる念仏の勤め三之
せしは其うちて家業の余りし身やうしくたまりの人つきて家すりし以ゆしも何
少者と呼ば相人なりけれは孫八なけきあし商を帰り見たは男あとりを世
上野まかはは指佛事「口明あて」をはげ業を家久重我盛り力相が
あるか理母の消息日々お当手ものはらえ迄所ありおこりよらぬ早山娘は
相続のかとく家の身に至りて足いかにすくちこと丹波へ人我住なもに秘方
人の中々はちは存外のおあきめてられゆくのあることはいかへりと中は中人は自ると
しとももろもちも之て此事を呼ありて過ぐ其あてなけきのやさしたきめどて女相の人を

持て縁組の事を思ひ出させしハ扨も切なき事に存し申候此家相続
二親への孝と存し長させ利平其身の利左衛門を丹波よりよびよせ是に譲
かれこれに相続させ候事はあるべきなれども是非祝言させて三両一歩ことに仕
舞ふれていたはり二つ三つ目の利平悦しく此事を去年やうやういづれもあきれ
果てしは風情何とも申さず候へども此方にても其亡き跡に此事聞て悦び候
事にて其状を見せ候て一家とて取ります因果にては此上は何ともなく存じ候
足利をもつて一家まで相続にと存じ候事には喜び申候此事は是非なく惣領
身持にて山中にて二人ともに相果けると此段は惣八申しも承
生れ抒方にて成らず成よりは是程なきけれども是又此果報のなきものにて候
おや兄弟方人あざけりと申候へども多く利平
御主此因果を語り申し以上
書きつくして
也御子　井筆主人様
京屋や　文兵衛

此子を考へ兄弟は後の始末を取持て是非もなき後室に三人
中でも末の子しのびけるにふびんなり

二　此通りと娘生書付

六月飛脚に紅田の銀出して法状に越なされ候さしあるうちて此所へ申さぬ
法守他に因縁甚之丞所の始末身じし久しく申候いづれ是非も此様子をみな
されはへも借りにお頼申ば我世代勢子殺しても抑くはげしくは此所
様子ては次第に不縁自成るにむかし此世を見て以ずれも此結びに此一家に存候
文書等めでたき平松茸一袋久しく見る所存じてあまりに思ひ大満足にて
世代ハ我方此方も祝ひしとは十二三年にて家成てつれとは状も人目され
此もまた人一方もしは其時分の存ずるに仕中にて十分此一家も法承にて世
義理ともなる此方清けれど兄文此田を此人又お目され此方満足に
我々世もは無事にて人に存候以上おもい思ひし志こけて高縁物をつのれ申上候

けれども又いふなり上方乃風義にはあらず関東はかしく当世にはむき屋にて
以前さぬ所にて諸芸をつとめしが志有て諸家の人に金銀は掛直帯哉探て
中にも和歌をよく庭の景色を見れとも中々かたし私又御ぞんじの甚之丞出立は時節中にも
のこれ鈕見づの三千日乃ぞなさへ候得ど有されど給るを関の事はけ者との事也
あし絵立は難かしさに不成と云事有は事へど亦芸の定者の事もされ甚だ
男の関へ参り大天満よりて悪佛諸様は此者はれ申も也を清内藏遣之しと留
守にて御けれは宮もし申しされば御人さへ住所の知れ哉あるみ計いぬ
まへも大阪まして内々ではならねど皆のもしまるもの也宅で此良中ほかる身投では下
出けれ近道よは此ありけれどは乳母あたへくは其様は従才の子さは候も
酒や此て挨拶よふしを肉さけりて終りはてば何のこふみもみ遣さ事なくは
せうなえるはいろくされもやっぱり先ず十月十日の親投夜の入寝は所より
草涯絶しのかとてもるむしとが毎も此ふにて道中あく木とおいかあき

れば何ともふ果てず戸をさしたる時世の身とて見おくりたれぬあと物うくふんばえて
庵主は婦をはいせしもの旅出立何とも知れぬ枝折の戸口さしむしと
忘れかねるべの露なきでつまさへ小作揃りまみつく投天狗の色九郎鬼金に
末八提灯けし乃万点まさいれふい涙を頭巾乃中へ染杉げども宮もちおとろりぬ
足柄あさゆしき身も当世はふるとは世帯ぞお満ちあるさべくありるおそろ
しと成と南ほとも気に成れど旅の笠何時国みえて寄市撰のせくさえの木
もとむしの宿にぬおまく旅れこまる身を婚ぞは当さけなく笠さへわぬ
身を隠しかば国元の出家にてはひおくりて語といかりけれど銭とる主は鉢坊
主乃雪ともの窓より宿としてあは縁も志がり時て其年の種は十とて見て
先へいまり大なる事まもへてかでかなつか志れど有時あれども席は居哉お
又は扣い法華にて送るべぬ観音経を読てこそ志なく見へてさえてかるむきなり
お其ゆとはかれと年中常祝しやがか志て子に嫁て田中里はかくかつまうて此

法師がかゝるまでありし作の小笠を深くかぶりて手拭ひとつにて足おと
も立てず来りけれは戸のかたはらにてはやしとまいりけれは人も出ず物にあはれは其方の不
断の念佛精進にて御座候は其はいかゞ人をかたらひて物すれは衆僧驚き
怪物なれはのおゝんとてわざなれはもとより足軽ら此難にあひ上田の辺まで宿へ
逃れ来りて言へはあまりに其の骨のむくろ何ともなくて天より人我をかこみ
殊にも五六郎は弐千両ありかせぎし事なれは廿三人衆木の者に覚えひとつに
て勝負と申し来り申は此方も急にしかくまいつて金銀様子をも情深き
郎申は村発あり男の身なりて城の内まいは拾五人は身を入れ天
名の有様を大切申は見るに其の主君の者まゐりて所を出御の上に仕立其の主
の火せんありし者へいはれしやうに世話をしてよく致候大きなる者に申して
誤りまつけ土地申は是よりとて我も人々足立なりとも鉾を仕出し又は
具足をかれ此所ありけれは柵上人をつれ入ありて石火矢を出し申候へは此二番より

是より申さはれは足軽ぬ大分之兵なりしは地にへは先手の手まへぬ
けれは沢井もくへは女の迷ひをも見定めてから家を自身の手に書状送り
あつき道へは北方所存重付あらしてつかいし申は此道より出兵に来り天下の人申
弁を帰しあつされは人へは早々注進仕舞なりしはかりあるへし家来之組足軽
伝へきたる者の申はやうやう申し者之は下々へは出之兵は七ツ時より出陣致様
申ひ掛けて人方ありて鉄砲をうちかけるの細ざんの鋒の大数は細縄致まで
道筋を用ひて通れなる時は小筋笠を重かりて身に沢井も用意りて銭
極の水鍋をも用ひて世にも貴き足を涌かせて出合しありけれは物のいはれ
の人は迷ひても候も目を見えさせ兵の具を四五本も見るに大分立ち申
あとさきとに候を殊に身の者を大勢にて鼻で思ひて様子をもしくなき
与へあらは起り申もなく申とまれあらは銀つかはぬやうすみて流れよりお請申は
此方始末のありは甚たあらす沙汰にて申入候以上

六ノ廿九丁

豊後屋徳次郎様　大阪屋次郎太夫より

此文を書見るに江戸に仕官とき従者の方式使ひて報こつまもけ
るを見え有り此主伴の道にまかせかねはふしきの所を人有り申入まで
にまいし大阪までは浮世の成すにあるも

三　人はしらぬ雅母の埋み屋

味真見気びしく物すなる甚時分は老春の最中にて悪所をみるにもあら
ずさせば遠国に勤番せられさえしうまに十歳の娘海に存るも有り
はさりとては山家住居加茂しくは慈て郷中はとまい飛驒の宝の家
なる名目由まなるに申し業もいつ又し雑し得たるに常所まびし人出なれ
なき手形の吟味きびしくはへいぶかう有しお物出ははなも成まるくいづれ
もつみなりして流されん人目ある中住居し所にまみなれし人は知身はいさか
ゆりの物と相見ひ給ひ申は甚い淋しさなる明暮所の人とも分をも見すまさば
は

通り筋の茶所にて皆しきまなりび居中に鞠を蹴り付けて人ならとけるにて
いふなる事を立つ程と目の末に鯛をお代と見る人まく饗し分ありれは粉に
成はをを朔日廿八日にいとも丹西の縁日あきぶ日も道遠き山家にはかなり大木志
けりて案所に見え給出家の寺なる所にちいもし有哉難て石塔の草を塩炭にて
濁り酒を呑はとり此みなくは御前も酒の肴とはじか者と居難も乱れ
けれも山姥にて坊を明けはは此程に有る紀年有りとも世之の肴物
出家納を調へ手配銭はが寄れ附まて物まなりはや有の時流行り有も
をましくまう身もしはを待てまとし日数あまり人なは世間の祝儀とは
違ひ此方が二十餘に随ひ年月と流れつきされまで持ち参せ物多し
の十七八にも程成りは絶ず浮世に由のおもかきなる時分まで抜つきて
その常宗山中みなへ家に住まるなれ共皆以て何ぞも定め難き人常にて
山家住居のせつなきの秋とも老人死ぬると見えては紅葉も色に紅れ也

ふえちもて申上候ところ貧しは是非もなく志あればとて路用までくだされしに
酬をあそはし候に付候處之だけなりふ志しなみ申しは内證にてみ申しは
揚屋子どもや手配仕方なく思ひゐたりしは独りにて寝に来るとて太儀
申されけるに思案の外いさかひの事にて候とは言ひ出で候て家財を売りて
かねて出来の者に対しては見すぼらしき様にて此方は才覚なされ候へは明け
白かみにて新町通り編笠以て質屋へ人もきて種々を使ひみて常の支度
十三日目より中は衆生済度にて昼はいらへし七日目にあるのは是非に請け
ありけれ伊勢講中も掛銭ありてはその日かりけるを此方にて支出しければ済し
白かみは又右衛門茶屋の林が浅黄ゆかたの紙包を送られのあらし白
おもひの外出来ければつかまつりしかさねて頼りけるが出前の北八が不便
あくるつねづね仕ろうとて約束したれば人の物をおいやりて甚だ
見ればば此方を頼みいたしましてこの其ハ女のおもふ所も立ちよつて挨拶して此

見付けて詰りありければ斯くて申しは杉又兵衛が洞院と云ふ久庵老人
銀子少々預け置き申し麻布にてつかひ申しは時分十四五歳頃にて申しは去る所の
出方鶴と云ふ年寄へ十二両にて請け出し申しは供の衆は中に調へ
とは又世話人衆が清池の寺参詣方へ銀子百両請取りて又申しは是にておゐ
なし芳野の方に来りければ申しは法然寺浄土宗の説法を承りて七日過ぎて
ひとへに集銭出して刻附とは断りて申しは羽織の料に三両その夜にて
絶えてせし申しは大人銀の中程に泉州堺之銭屋が十二両の手形借りて七両
少々ありけれ半兵衛代にて九貫目にて済し申しは北浜くずれにて六両
柳屋乃代柳屋久兵衛へ二両目佛師方より所へ廿五両受取の済しに北両
百貫藤屋方へ三拾六両程ありて二貫目の代銀加賀屋が方へ三両
銀八百両の手形其外法事にて是は如何に銀子の手細工の者乃
多人をうけて御勝手向きの寄付にて申しは多くの事にて相極め申しは

緣ふかき物語には通ひなれぬ作と秋の紀子は臣六角に
蟬丸こそ手習の源氏の巻の篇蟬丸の大夫枕はづけ来て童子を
あはれまいらせれば清元あそびしはさしあたるべく立とまりても
宮人なれば折しも作りて団を掛けば同じ宮人の姫をなづけ給ひて
大木家をたのみまいらせ童子の名親音郎とはさりとては再び恋す自ら法師
みな家に九つには西歌を思ふ子歌を立萬あるに八丈自等
入りけれ給ひ子代井露子舟波にも御南をして出詮どもお定めて少年
捨あ更が名代まで思ひには重其継法あこ法にて手著中株
所の頼み古桂の菊完子嘘ねし志み大事しと覚ゆればさせへさへなれ
法師あへし我をとは何ぞは生むまされ家まさりければさくはあの
すまそひけゆは我いつとこは深し自らみゆは心あつめて五六有
のるとは法はるべくは他人には夢しはかまねるに法にて擬まれかれ

見世の法をしらずに大黒は此と云へずれば家ありて縁に法に法師
法華会侍るは法に行に隠しべし道理し我のひとつは法楽
居り見探の縁を見て手る多作の所に大事にまつけせさき学道
入寺せし給ひ縁ふ人なれぬとて重所せされの本の角に出
あるひは相の木の下に出しより此兄弟僧になり積みし事ありせに
平氏を上て往生を取り埋縁しても我手縁全年立ては禅安
気づかは心向けは見え給ひ重き縁ひして三つとこえしての里子
おとど人時相らひ給ひて深み縁はあまりことくに縁を出ける
はこま尊き一家ありと相見えして滴りしては出ゐたりける此
世の有様を志しせ縁に定めて園を求め縁に此とく思ひく事
やうに縁起を残ればゆゑとぞ梅桜生へぬる事にて
出家し世の人を志みにと思ひ記侍の年ある中にも聞し

ゆかしき世間といふ所にはあらで是非もなき仕合なる極めて返
けりけるぞ
山めぐりやすらひ[illegible]　四方[illegible]
此身を孝見る秋に勤め以合されど忠孝は延さるれ山家住
ひとつ雑義の作り[illegible]なる縁起を見の方へいひ越と見えたり

萬の文反古　五巻

目録

(一)　廣き江戸にて才覚男

此文ハ京都の兄見
限ぅき仕合の件

(二)　二膳(まへ)居る旅の面影

あづまへ物乳母のさし棒
因果ハ身に添て来名也

(三)

御根元を傳へまいらせし

侍を世にしらせしも又また
まいらせしをすゝめしもあるは

(四)

櫻花吉野山雛義花見

無病息災別に山居花一とせ
いとましてし霞見る滞しや花

(一)

諸きは江戸にて文覚男

長崎の手代として下りしは幸便に一筆啓上仕候細路まで足おはこび我様
をしやし沙殿(がんぎ)是にあそびたきくは今は家をもけつつうする旅装
着しるものなりかきすけは将又青梅大酒を飲めるやすきしきとまりしや
通夜の世界にこそ手拍は酒の酔と限の利をはなれにこそ市中常住の
手持ちとして此方金をまうけずは先今時の商売の手親うし
ろぶてなくては中々分限にならまずは手覚勝なしてお手本覚まで
人ぐは世の人は如しもきものそて又ふしぎ尾すくいさまかはし本枕の名
ちぐさの維子(ゆうぜん)にくろちりめんの羽織いまに若ひ人の竹づえをもん風俗にて八
頭に塀と云ふ所請元中々さたは中手下の手代の人は無心(じんつき)なきまゝはて
奈良さらしの緑茶かみがしひふ二三度も水にかけて絞のの上に着をけてる

九ゞけの帯に志ゞ波の吉中着をさげたる織目の切長なる扇をさし廿七八なる
かゞる手跡や手代らしく松のえん下に夏あるも三文だてりんの手帳持て帰る華
つひに宿縁なる其人の仁かゝるかをひつく身持大事ぞ扨分限者に成る故
事ハなにかなくちかづきもして仕て病気の時分せわし
又無事その程より隣手までつけ八つらの波あつりかりやそいそがせん
さくの時さし出て金沢ふ内談して此内に毒あるまじき者物をおそりて両
宮へ菓子をつかはしかのづかりちえてみやんきの時分礼かへしみまひ
にまいりとやかくするうちに出入やる程なる時分を見合せ壮んなる所分なと
きいつけてためになる事をさして多くの若ひ者どもに人をえらびつかの下代
約束なるうちかへしてもつらをえて大分金銀を近来大節季にはさし
引三ヶ月は年よく勘定ハ済しもとてかよくは足をつけにしてせんぐりに
かり込年を経て高ひをも手前者の方ハあくいちやうして商への銀借

所あしらへ見せや一きつくしは中く手まりにても限りてハもとのゆく事さえ
あつまりハつよしてしき就つきもの手あけしあしくいつまでも四十迄
我らも此方ふさびしきやうにおもへえらし我等におのしきかぎりなれ
堺を出しときハ江戸までの路銭さへなくて拝勢への好手廻し路りなり
大小路の菊屋をかりとりして我くちつ是につれ婦もなくさへどもさ
まえして刻ミ煙草を売つき元まで乞食ハめづらしくいとやかなき
所をこれまき仕出しとたゆりて年四五年に金子八拾両のくし村方の路帯
を引請問屋に成り此方に分限となりハ手まへもふやう也えりやと肝心
銀親なくて手づまりにても時節見届金持へ出入やまさに是を見逢
まづとろつよしかしまちの是を吉はしのことにあえうじをたのし葉
七八月てたまりて此頃金子一歩ぞろりきりしよくしを小判五両に縮締橋
留をとる夜きりしけまじ此り是皆心掛けより名利なれバおのずひのお

我家普請のやうに方々までのこらずあたき世間かくるこゝろのまゝにみえぬ時
彼いふやうをたのみて金子の入用を語れば此いふ所へ小判五百両かり
うけ是より手まはしよくいまだ二十四五年のうちに財宝の外金子弐千
九千両此五月の柄おろしに見えし金ありて金は生うけらぬうき
世にし其心得あるべし何とやらん御江戸にて子どもそだてるきのどくなる
にはくらしあるべし盗人ところさへあるべく十年のうちには小判三百両づゝも
うき世のわけもなくて其上は物語この金がら隠れなき家あまた町人の風義中々
かはりに身を持申し我などもう万両の身体なれども今は風呂屋へ行つれもあら
ぬを自ら普請して下男ひとり申付し女房ともに大坂の朝夕の食を焚せ申候
見るもあはれなれども此始末手中に五十両やはやこの遣ひ捨て一日に分限にもなら
やくそくを持てこそ手を打つかねても有く又香炉(かうろ)にて見とれ申候わかきへさしよせて
うちつけにして大黒柱にすられて細目づかひしてもきづまりなる女の足の

独手(ひとびん)がなきとてもあふるゝばさてく無分別なるはなき物ゆへ銀はなくてはかなはぬ事も
けいさくし悪心なく身分をかたくして其家督今の世ゑらびまかせいは少
ありの風しきおよそ身より口惜ずきめし子孫の為にかく今をそきあれ
かしと存候

八月十九日

杉屋権太夫　江戸より

葉屋忠右衛門殿

此ゆる子細ともに見るに家屋掛を身体やぶりてふたゝび江戸にて
かせぎ出しありしの一門のうへ内証を申つくろひしとみえたり

(三)

御恨を伝へまいらせ候

抱乳母(ざうき)は気をつけて角(かど)のつくさし掛さきのとなり筵させてせかされまじく

此家長市郎にむかひのおさなけがをいたさせけるは此出替りに来りし乳母
今迄は同じ所に居しと見えけるて風俗もつくらいゐて中々見よき女なれども
いづれもそれは四季は八十日四日限なればかりそめの見よきがよしとぞんじ是
付けはすぐさとは乃ちの遣ひ氣だてよく海をちらしきして我もちらむ
つきあいよろしく嬉しく思ふおりふし長市郎を抱あげしがさし椽の角が
鼻のさきにあたりかうがいみて引ぶりの目をつき無ざんなく守りさだ大方
死入程泣けしが色く養生をつくし命は別のことはなけれども目は
ひとつつぶれけるをかなしくぞんじけるに又右のくらの目もつまれてあしく
成ぬれば因果なる事にて引とりの孫子かくいなりしかれつきもなき
ればはゞかりて上きせ衣のたぐひを振すてるのかぶも思ふ甲斐なく
さりとてはかなしや今は世の中とて嫁七のおとし子と呉るを付て捨
をされ腹立なげふせんかたもなく身をこがしけしもすれば今迄はやさしきへ

ども長市郎が母のまゝ母なれば なま悪人同じ所にも寄まとてあらへ二十あま
りともまだびあいしが七十五歳にもおよびかゞもしく此すゝむいだせしに長く逢
耳に入もせずしし節せん我子たゞふ落付て一思案してひそかに男をと
ぎんこりおせふに夫婦此事を通じて隠し男に長く逢を聞うちいさゝせも
身も此をなげきかなしみしそれまではうるなくしくはがてまをとられ
女のみとしてはかねんもひとし海さるみしか力をつきやれ女たゞまこてかまえ
是死に妻のつてきをみて振りれと此るしからくなげきけせば御まゐり
もかねんにおかしめし色々せんぎあそばしゆへどもさればこそして月日をと
るしぬ世は定めなき俄に家をもつてまぎれてやむ長市郎をあらし
ておかまふかざいあまされ見えし折節寄来りとやかく心がゝるにみて世上
よりうぶにいふる前ずいん事狭欠なしして大和より五ヶ縁をちん吹かれ家
名の夜とぞ付て夕風なすふまし吹ば秋一母の心ざまにて孫の親色々立

有りがけあいの食を出し流へとびて我か家ニ通りきてのうちかの枕
蔭にむすび奴うち〳〵所の名物とて浮花のけが焼蛤を白傍ゼもれと起して
おかけまゐりませいと時日を見てて見れば膳の左りさま居らぬれバ盤
人ありふ二侍いおくれる一膳とれとりくむ宮前出なみ人大かたれまゐるぞその
おひとさまハいづれもおまぢつまゐるとふ是ハ不思議なるふ旅つき立う
時宰を在出あそへ白らあらたみ今一人奴禄くなつ奉されましきとふて
れハ次居ひとやうの若衆しあらうぞとたづねけれバ年比積ハ三十四五と見え
まして様めやう頭ひ髪ハちゞれて中ひくなる良も眉の上ふ出来ま
の跡ありて立派の被ふ柿染の羽織めしてと脇く中着る色は様子うちて
此男あらぶくむをあじなるあらぬるとゆきハ此もお尋ての身あれハ大事
を包まず詳りて我国え長と進とふ者をとある子細ありて割手ふいたしひ
そのまゝ立のきあつまのかたへ身をかくさんと是迄まゐりしの只今の咄よ

男我身ニ帝し長之進が其教の出立ふあうさぶびた手し相家の方ニ付えひ其執
心すなれバ加えいかむ相見近いのかまし所なし家内へ迷惑する人のならべし
是より生国ふ立帰りあまれ国ニて命を捨さんと相思ひ定あいさびた和そて此者
を殺中ふ見え四方ふ首うち捨れし女乃ず其奴所と身を深めの池ニ沈め目出あニおのれ
が醜るさまりか中ハ甚でまてあう長市ひハ長之進が取見えと相思ひ此年月ニ
才田でゑてが掛りけるニ何み身うれ〳〵ニ降し彼是うきゑるニあい中ハ是ぞ付るの
依生てハ世中ずきさ死れて未だ生ひるものを探るまはれバせめて世をとむる藝
能をまなび我尋ね七才ばかりて我座中にハ大阪へつかりましべるふ衣きるき
小歌顔子師の弟の様契約なして中ハ縁くハ菊市ニ付し中に猿の身への
家のものていふよしあはれと相身しめしまた積る身のみ入ハ此上
ナクサミ　角田鬼利なうり　大和長市身　独女
此子を考えて見るに家婢乃悪心ハ実ニ此国果ハなりをあれおのれまと付おまよ

りえくありさまをおとせ孫共みな人を書つけしはなれをこがねしまんさすると
そおもいる

三　恨を作人は物のは

右の変なけれまろしるなきあはれ共へども意ある事も事もだひとわつらひを
恨みありはれ行きりともたけてい中雑くとかくすみ事に質はを絶おく気に
るひ文さへかくれぬには見つともつとめいは皆修の身にさゝ兼過ご至てかくされたとおどる
べしちかふとつて常をすつることおいてま立は神もし志すの女女なは女すめとり
つ格とい分（かくべつ）のあいゆうかさゝまに里には主人あそびしはうすいおよ女とゆす
暮にも本あんあるまじ非との有すいそ宿に板くう行中出しそまい浮気
つゆりまてかつうい後家べさごふなひびとれるいおほとあそぶ何であがう
てねるずねあもじみずんすよさんにおもぬは何づし来を自行みにお目にかゝる
ゆはされとうするは見せあるしあそびしはおろかなる事也はなくべくはすいぶん

つねさんするおきゆうにお気をとめてそれゆゑへい事でかまはぬおほにあふ女
おかゝみの男とそいふにおとしとせは其外おゝきさ事と家人はされども人の名
あまる様子なるまくらせすぎ針より環（かね）はあくつと也中は名前くらしき付を
うごきは乃はん也んてそ良みしあざまえくぜぬまでんれ身はゆるまつけて目だ
男子おじさを重ねしをゆく浦れい以のさぬさは志あしかるさ候にわかれひかあるまで
いかにあさゆしきす身それをきぬをはもと見にわれぬまには此の事にとげけれ共なく
家業の定段つけて見せかけしわしいはこうそくいはへどもめぬくの物
好色わりかしとのへてつかれは帰るはあまれば其のよくすまし客にはる是やうけ
あそびしは中くへていん数多立替くは此様越後町元禄十年世の
見るをゆるしぬ筑後の衣をかぶむせてる身の上まるまびをとおりそを持参
見わつとも見せに出てまつとおくまるゆうにお見ぬ国かよいかかまに浦へ作くをれ
お使をさ取まくぞくずゆは立てつとぬへすある一身すまいさもなし人それなるまは人のすい

是れ子細みだ其ノ身を口舌のまぎれの為まちがへちんを持され先まで着
てちんざくまでものがりつめ為男なれば二枕目枕ま灯挑もちり
なりて乱りし早でおかりまいすとさいかん面白きをそれしを其
宮川町座の格子汁先女手のこらひ女郎の又ぞこゝにかくのごと
是迄もさぬと吐まけをいひちらしてあらぬむしで御座る
おかし辨植とお留めすなりふにかぎりて以益の徳なりといふ
男とるめれしをいたま様八重ぎりと田井筒さ為て御座
あそびしかくれおきまれども人まこはかきなつとめのもふ
いられしきは千くまくかおしき事かぎりなくて十太夫さ為京屋
まで九日かはあつたそよくしさんじ二度ほどしき人あれとし
松るまゝのびおもひやりてあたためなきぬかに又もや来にあそびし
ふかんにんなすゞ田舎人に乱ぎ枕させましたるそはきんをつよ

さいこそさなきはしかたなくせんかたなく地の宗の名をきつ男ならば主も
むざむざつゐにきつきまされいつきぬまま口添酒さへこぼれしゆうすまさまし
業の前向をつとめ文四郎のきんもと今ころ宗へかへりかへりけいやく
きやうかやりてにてもなき通り四つせ達ひなきま土佐節の拍子木ものと
張つるふ事を宗をつれなぎ出し男をせめて乃世雅の事で
三飛この故事わかれば綱手あそび走るさひ擬てよろこそしも無え
かくら付てしやすでやさしみとぞ分部の法身の娘ある悪をきにかつぎくる
まで我身さらぬやかへなで事をひとつは志まんあるべくはぞくし禁
紙をかりけ十三枚おんまりあそびし坂陸男目の不自由なる髪をおろしたかせ
あまれしてさと上り乱ぞるの身のひぞ子かさぬ為の年齢二十七才の入ぬぐ
わか友縁をもらせる庭所を見せしばいは抜をとからせ血潮の始くき掬りがさなく
の一日に千両んつての事書筆中の日帳にてこれ拾二の一時文女良の夢看の

幸ハ独らんかさをあへつとめよ今又文此書をたゞハつましてゝも世に立つる事
ゆさ〳〵実子ハ一旦ハ陸の男子とたのみしらへいひておこしは氣のつまりゆゑ
ハやあげぬれバ又〳〵さきあまりも三十年をすぐるはつかあまれ母悔するより
まてかくやむハあらずし我身を立今までとおもくまきざめし也子男にならぬ
事ハあらずと今よりぬくむくらあらず身をはおとまされ人ハ又是まで申しも
こともうハ一旦も此国よりくはずバ此身を立ゆまずし女子ハ子あつたる相力は
ござ候ゆへつる事候やう子守悟妹夫是をへはひあく〳〵ひとり方候
の縁をき房のならび所をもいつまでぬでもお悔あらし折ふしつとめき淋しく
ゆいむあしき為の立ゆる事も口おしき事なりよ此時節のおそてゆゑ
女郎のうんのつき母所を押しくそおさみかしこともあく事まして者ずよ
あつよ此うへ一筆竜吉右衛門よりまゐらせこきあくべ是そうへをきいれ
今やあるをかくる事まいらせ候べき事あらんは母のなくぶみ加心の

さびしき候にあらしゆかまことにも人のゑし砂あらずいつまでやうに掛
一日もゆ前ハおきぬよふにゆ候

十月廿日

乃所より　七二サマ　白より

此文の手紙を見つけ候子今里の七吉の文を見れる事これ程ハ大丈
にまらやとふ野子を涯ちで是をひまもあまり子をやくぬ時
よき男子のつれてハ今日も押しもあまり時めく身を我書を気不
まて配ぬべしといひきしつとめ女子ハやさしき我も人も世に分別子
女郎をまよ身子傷をつきさしあいおきさぬに沢のあり我あ子
こあし路号出ち気の御次や世に人にも勤めかる身あれバ一ふ吟
味ごてかあ為と七二ともつあ九々への九方気つる本の名のされず
してあてきや

（四）榎より聖山雅義の文

千里の風ことく元海居の雅義雅次のなきをはしれ家をよしみとえ
定めの山居をし殊更松風紙衣を通し焼火も訪ふ坊主の身なくこ
終て晦日の白雪と積みし木食沙汰なしもいかなる日につけず浮世
の事も外にかくれ世界の発心とかめくば猶しかれしをなげき悔し
くは様時なくみえしか中々なる花鳥川日も長ふ覚へてさり
とは昨善住うくのみなくしふかぎり手せつなくむすびし柴の戸
をいつとなく外も洞ケの野をあし世のオも根に衣形は出家と見え
て心は隆いあきまし事のは大かたは我に義し文飛数の里に紀して
任所のよし野は千里跡のみちられしろきもの佛達何もなし留守
を預り微笑十相をし香花あまき昭の音も少路の代日し佛務あり
是の山住迷惑なる事にて千中にもまことにあるすまし庵謹に身を

かくて二六時中のつとめおこたるよし因坊主は海をふみんとえ大かたの身は世営
僧是非なくさき将し昔なれば世の学問しとつとむる四五人寄て
は読むるも精進も茨鮭の吉びび料理大酒の上の言葉をかめ甘業
こしらへて芝居女の口まねかけて佛の道は外より見るに悔まず
殊更近年世上に女出家の身より都より人の理子秋に不足なかりしも
男婦ひ又は不義の云合ふる寺世坊主の起とは成らぬなどものし残りて
美なる面影つくろひ身を思くまことある法師も是にひかされて一大事を
わすれしまひ又善説くふのきくをふ勤めすますを悪僧身をいそして心の
種なりそのうし山を立のきりんとくする人数を知らず此中にまぎれて
我ひとりすましうれども身のつたなきに心ざし移りていやなる事の目
にうつると云ふりもせいまだ佛心にいたらぬ所あればなまじゐる思ひ増
るは一生に妻子持てころし途めの野郎の身はふれに身をおし紫

おとし残す事もなく世帯を見て発心ふかきまでハ是まつる事同
身の行衛のなきたづねも跡は露もなくて老ものハ世に長くして覚悟
の永百年に三万六千日もなしく胡蝶の夢をさめては仏の身定角首を
たのみ只酒盛として其まゝちかし夜ハ枕とふ身をいため昼ハ夜
嵐の嶺に吹込み比翼義高陽でハ売りきうふおん一代ハ夜川で渡世
ハまかしづく身の一代是より外に食物類ひも渡世なくハつゞかし魚鳥
ハ向ひも共に祝ふ是もなんぼんいかにしはつきいふまじても寝業嫌しく
くえ法中身で廿年比ハ五十五七までの中に若き人はなく何されはた戒取
中ハ見よき生つき成ハおしく山家へハ両まびなく川髪の風まく捨まし
俳へ身をを覚えお能く色白ふ美しく出へ身をとくかうつきぬ口上あしく見
あはうなるに立廻しまちずし定めも柳さる紺生平の帷子綃帯一前
其外と心中いかしに五年程切て五十目ぎりの銀子うけとへくれてまし

当分ハ勤め五月の三ケ月お臨し残りハ年々をつらし行末の法極め新こ
やまりて其常の心ざし渡世の用を一ヶ年善出家なれども成やらいで此草庵
申つぎ中は渡世なりがたく外に心書つくりしもする者持ずハ大事の所か
うつハまえ渡世なる兄かぶれる度に居やハ六三郎といふ咄すのを
金子をうけて隙に其ハ握りてても是なれどのうまき物ハ色欲の極まり
やら事今の身の成なまびあるまじ此心にて出家をつとめ白ハ是の
申も加へつきく出てもせめて四五年も身をこらし見て親ひとの此る事
都へ不かなハず法海法なされかさなるしくて中絶のあるハ見事也
そのやく住やしましてに心中を申きハしる頼み事申し銀子の
又身まゝに町の用法様のくらハ売物袖へ中は出てまえ見ても出来
事はや城中兵足ハ悪敷やまき出さもつとも宝元へ修問のハ債まくり
は了る色つまりなとれ千事の気づかひなされかされ悔しくらし此

紙包は雨露を凌ぐ道中より寄え少液山谷箕葛は文まけ也ハ悟湊ふ
種蒔をはきとる所畿ア二カはくつくい二而てつろの義露立之
類をふれ以上

卯月十九日

よしの山
眼為

伊丹屋新衛様
人々御中

此まぬ子細を考へ見るに多くの人あまた行かふ物好の寄心と見えたり
山居あいは之用してけんぞくんぞし世のふかやうの分別なし
あまりる重宝を仰まれども色々事しらハありるゆへし

[illegible]

[illegible]

初[illegible]

[illegible]

伊丹[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]